



さんじゅうさんげんどう

三十三間堂は、どんな建物なの



たいらのきよもり せんじゅかんのんぞう
平清盛が建てた、1001体の千手観音像をお
せんたいかんのんどう かまくらじだい
く千体観音堂を、鎌倉時代に再建したものだよ。

三十三間堂は、京都市東山区にある、蓮華王院という天台宗のお寺の本堂です。
母屋の柱と柱の間が33あることから、三十三間堂とよばれています。もともとは、
平安時代の1164年に、平清盛が、後白河法皇の住まいである法住寺殿の、仏像
をおくための建物として、建てたものです。鎌倉時代の1249年に火事で焼け、
1266年に再建されたのが、今も残っている建物です。

たいらのただもり

平忠盛が、最初に千体観音堂を建てた

平安時代の終わりごろ、平安京の貴族の間では、死後は極楽浄土に生まれ変わ
りたいという浄土信仰から、華やかなお寺や、そこにおく仏像をつくること
が、流行しました。1132年に平忠盛が、鳥羽上皇の命令で建てた得長寿院は、柱の間
が33ある大きな建物で、1001体の十一面観音像をおいたことから、「千体
観音堂」とよばれました。この得長寿院は、今の三十三間堂の南にあった、といわ
れています。

平清盛も、千体観音堂を建てた

平清盛が建てた三十三間堂は、父忠盛が建てた千体観音堂を、受けついでたもので
す。その中には、湛慶という有名な仏師がつくった、木造の本尊「千手観音坐像」
(国宝)や、1001体の木造の「千手観音立像」(重要文化財)、「木造二十八
部衆立像」(国宝)、「木造風神雷神像」(国宝)がおかれています。これらのほ
とんどは、鎌倉時代に再建されたときのものですが、1001体の「千手観音立像」
の中には、最初に建てられたときのものも、いくつか残っているようです。